

「天気」の参考文献の書き方に関する意見

1. はじめに

本稿は、当初「天気」編集委員会への個人的な手紙にするつもりであった。しかしながら、書いているうちに「天気」の読者の皆さんにも、参考文献の書き方について広く知っていただきたいという気になってきた。なぜなら本稿は、「天気」に限らず他の学術雑誌に投稿する原稿を用意する時や、投稿された論文を審査する際にも役立つと考えるからである。そこで、標記の件について「会員の広場」をお借りして意見を述べてさせていただく。

2. 問題の所在

筆者にとって待望の「都立大科学考察団ユーラシア大陸二人旅」(松山, 1997)が「天気」1997年9月号に掲載された。「著者校正で手を入れた箇所がきちんと訂正されているであろうか?」と思って、参考文献のところを見て驚いた。正しかったので初校ではそのままにしておいた文献のうち(第1表a)、いくつかが誤った形で「天気」1997年9月号に掲載されていたのである(第1表b)。ここでは参考文献の書き方に関して、重大な順に問題点を指摘する。なお、以下の1), 2)は第1表b欄外の数字にそれぞれ対応する。

- 1) 巻に1号からの通しページがなく、号ごとに1ページから始まる雑誌は、号数を省略してはならない。

論文の書き方や体裁に関する教科書はいくつかあるが、このことはTurabian(1996)でも述べられている。

具体例を挙げると、「水文・水資源学会誌」は1992年(第5巻)までは号ごとに1ページから始まっていた。しかしながら1993年(第6巻)からは各巻とも1号からの通しページを掲載するようになった。このため、近藤(1992)では号数を省略してはならない。

「地理」も号ごとに1ページから始まっている。このような予備知識がなくても、「天気」1997年9月号(第1表b)を見ればページ数が重複しているため、松山

(1996a)と松山(1996b)が矛盾していることは一目瞭然である。また、同じ「地理」に掲載された青木(1996)では号数が併記されており(第1表b)、統一がとれていない。

「気象」では、奇数(偶数)ページの右上(左上)に通しページが記載されている。しかしながらこれは巻ごとのページではないため、内藤(1996)では号数を併記してその号のページ数を記した。そもそも「気象」では、偶数ページの右上に“気象”巻・号(内藤, 1996の場合だと“気象”40・1)という表記がなされているが、表紙には創刊以来の号数しか見当たらず、「気象」が号だけの雑誌なのか、巻と号のある雑誌なのか、取り扱いに困ってしまう。本稿では「天気」編集委員会の指示により、「気象」を巻と号のある雑誌として文献表に挙げてある。なお、最近の「気象」の通しページは1957年6月の創刊以来のものかと思ったら実はそうではなく、調査の結果、1961年1月号(第44号)以来のものであることが判明している。

「水温の研究」(1983年3月廃刊)に掲載された中尾(1974)では、奇数(偶数)ページの左上(右上)に通しページが振られている。しかしながら、これも巻ごとのページではないため、松山(1997)では巻と号のある雑誌として扱った。調査の結果、「水温の研究」の通しページも1957年2月の創刊以来のものではなく、1963年5月発行の第7巻1号以来のものであることが分かっている。なお、松山(1997)では筆者のミスにより中尾(1974)のサブタイトルが欠けていたので、本稿の参考文献ではそれも合わせて示した。

これまでに述べてきたように、著者校正の段階でカッコ書きで併記した参考文献の号数には意味があるのである(第1表a)。二校以降では機械的に号数を落とすのではなく、その雑誌に巻ごとの通しページがあるのかないのかをその都度考慮する必要がある。特に「水文・水資源学会誌」は「天気」で引用される機会が多いので、注意が必要である。

世に出てしまったものは仕方がないが、このままでは「天気」1997年9月号(第1表b)をもとに文献を検索しようという人が、目的の文献にたどりつくまでに右往左往する可能性がある。

第1表 松山(1997)で引用した文献のうち、「天気」1997年9月号での表記に問題があり、本稿で取り上げたもの。(a)著者校正用原稿(初校)での文献表の一部。(b)「天気」1997年9月号に掲載された文献表の一部。(b)の欄外の1), 2)はそれぞれ2章で挙げた問題点に相当する。

(a)	(b)	
青木栄一, 1996: 鉄道ゲージの歴史地理学, 地理, 41(11), 30-40.	青木栄一, 1996: 鉄道ゲージの歴史地理学, 地理, 41(11), 30-40.	1)
花輪公雄, 1993: バルク法による海面フラックス評価の問題点, 気象研究ノート, No.180, 31-49.	花輪公雄, 1993: バルク法による海面フラックス評価の問題点, 気象研究ノート, 180, 31-49.	2)
木本昌秀, 沈 学順, 1996: 陸面過程とモンスーン, GAME NEWS LETTER, No. 2, 5-6.	木本昌秀, 沈 学順, 1996: 陸面過程とモンスーン, GAME NEWS LETTER, 2, 5-6.	
近藤純正, 1992: 水面のバルク輸送係数, 水文・水資源学会誌, 5(3), 50-55.	近藤純正, 1992: 水面のバルク輸送係数, 水文・水資源学会誌, 5, 50-55.	
松山 洋, 1996 a: ウルムチに水の風景をたずねて(前編) 一天山山脈の湖とトルファンのカレーズー, 地理, 41(4), 30-33.	松山 洋, 1996 a: ウルムチに水の風景をたずねて(前編) 一天山山脈の湖とトルファンのカレーズー, 地理, 41, 30-33.	
松山 洋, 1996 b: ウルムチに水の風景をたずねて(後編) 一中央アジアの最低凹地とバルハシ湖にそそぐ川一, 地理, 41(5), 28-31.	松山 洋, 1996 b: ウルムチに水の風景をたずねて(後編) 一中央アジアの最低凹地とバルハシ湖にそそぐ川一, 地理, 41, 28-31.	1)
内藤勲夫, 1996: 数値予報と地震予知-GPS 気象学への期待一, 気象, 40(1), 34-39.	内藤勲夫, 1996: 数値予報と地震予知-GPS 気象学への期待一, 気象, 40, 34-39.	
中尾欣四郎, 1974: 閉塞湖の旧汀線からみた古降水量の推定, 水温の研究, 18(6), 17-26.	中尾欣四郎, 1974: 閉塞湖の旧汀線からみた古降水量の推定, 水温の研究, 18, 17-26.	

2) 号だけの雑誌と、巻と号がある雑誌を混同してはならない。

これは、1)で述べたほど深刻な問題ではない。しかしながら重大な誤りであることは間違いない。

御存知のように、最近の「気象研究ノート」は号だけの雑誌である。しかしながら、「天気」1997年9月号(第1表b)のようにNo.を落として号数をボールドで表示すると、第180巻なのか第180号なのか区別がなくなる。「GAME NEWS LETTER」も同様である。このため、花輪(1993)や木本・沈(1996)では、著者校正でわざわざNo.と明示したのである(第1表a)。No.をボールドで表示するかどうかは「天気」編集委員会が方針を決めればよいことであり、それほど重要ではない。むしろ、No.を落としてしまうことが問題なのである。巻と号を区別することの重要性は、論文の書き方や体裁に関する代表的な教科書であるThe Chicago Manual of Style (Grossman, 1993)でも述べられている。

なぜこのことにこだわるのかと言うと、現在は号だけの雑誌であっても将来は巻と号がある雑誌になる可能性があり、その逆の場合も起こりうるからである。このような時に紛らわしくなるので、号数だけの雑誌の場合No.を省略してはならない。前者の例としては「地理科学」が挙げられる。「地理科学」は1981年(36

号)までは号だけの雑誌、1982年(37巻)からは巻と号がある雑誌に装いを改めている。また、後者の例としてはここで示した「気象研究ノート」がある。1950年1月に「予報研究ノート」から改題した「気象研究ノート」は、1966年(第17巻1号)までは巻と号のある雑誌であり、ページ数も巻ごとに1ページから始まっていた。しかしながら1967年(第90号)からは号だけの雑誌に変わっている。また、号だけの雑誌になってからも、1989年(第167号)までは年ごとに1ページから始まる通しページが採用されており、現在のように号ごとに1ページから始まるようになったのは、1990年(第168号)以降のことである。

なお、本稿を執筆するに際してもう一度松山(1997)で引用した全ての文献を見直したが、嶋田ほか(1992)は号だけの雑誌であった。ここでは改めて図示しないが、これも筆者のミスである。

3. 「天気」の投稿規定について

2章で述べた巻・号の表記に関することは、最新の「天気」投稿規定(「天気」編集委員会, 1997)にも明記されていない。そこで、執筆要領の参考文献の箇所に以下の文章を追加するのがよいと考える。

- ・雑誌の巻数は太字(ボールド)体、巻・号のある雑誌で巻ごとに通しページならば号数は省略し、号ごとにページが代わる場合には3(4), 1-21のよ

うに書く。巻がなく、号のみのものは6号, No. 6のように書く。

これは、地理学評論 Ser. A に関する執筆要領(日本地理学会, 1995)のうち、当該箇所を抜粋したものである。また、この表記方法は、科学技術庁が情報流通の円滑化を図ることを目的として制定した、科学技術情報流通技術基準(SIST: Standards for Information of Science and Technology)でも推奨されている(日本科学技術情報センター, 1992)。「天気」編集委員会でも、投稿規定の改訂をぜひ検討していただきたい。

4. おわりに

参考文献とは、本文を読んで興味を持ってくれた方がさらに独学で勉強しようという時の道標だと思う。そのためには、今回のように必要な情報まで文献表から落としてはならない。常日頃、参考文献の正しい書き方を学生に指導している者にとって、今回の一件は非常に残念なことである。

お断わりしておくが、これまでに述べてきたことは「天気」編集委員会の怠慢を意味しているのではない。逆に、仕事熱心であるがために今回の一件が起こったとも言える。松山(1997)では著者校正のあとも、第1図中の文字とキャプションの違いについて、筆者が見逃した間違いをわざわざ確認・訂正して下さったりして、「天気」編集委員会のきめ細かい仕事ぶりには本当に頭が下がる。それゆえ、本稿で指摘した単純なミスが非常に残念なのである。「海外だより」とはいえ、いや、大好きな「海外だより」だからこそ、こちらも「論文」以上に細心の注意を払って原稿を用意しているのである。松山(1997)の第1図に対する心配り同様、参考文献についても念のため筆者に確認していただきたいかった。

木村(1997)でも述べられているように、「天気」の編集・校正作業は大変な仕事であると思う。編集委員会そのものが日本気象学会の会員の皆様のボランティアで成り立っていることを思うと、その思いはなおさらである。できれば、本稿で述べたことも編集委員会でも考慮していただいで、極力ミスのない「天気」の発

行を目指していただきたいものだと思う。

(東京都立大学大学院理学研究科地理学教室
松山 洋)

参考文献

- 青木栄一, 1996: 鉄道ゲージの歴史地理学, 地理, 41(11), 30-40.
- Grossman, J., 1993: The Chicago Manual of Style (14th ed.), The University of Chicago Press, 574.
- 花輪公雄, 1993: バルク法による海面フラックス評価の問題点, 気象研究ノート, (180), 31-49.
- 木本昌秀, 沈 学順, 1996: 陸面過程とモンスーン, GAME NEWS LETTER, (2), 5-6.
- 木村陽一, 1997: 編集後記, 天気, 44, 682.
- 近藤純正, 1992: 水面のバルク輸送係数, 水文・水資源学会誌, 5(3), 50-55.
- 松山 洋, 1996a: ウルムチに水の風景をたずねて(前編)-天山山脈の湖とトルファンのカレーズ-, 地理, 41(4), 30-33.
- 松山 洋, 1996b: ウルムチに水の風景をたずねて(後編)-中央アジアの最低凹地とバルハシ湖にそそぐ川-, 地理, 41(5), 28-31.
- 松山 洋, 1997: 都立大科学考察団ユーラシア大陸二人旅, 天気, 44, 669-676.
- 内藤勲夫, 1996: 数値予報と地震予知-GPS 気象学への期待-, 気象, 40(1), 34-39.
- 中尾欣四郎, 1974: 閉塞湖の旧汀線からみた古降水量の推定-地質時代にさかのぼる雨量計としての湖沼-, 水温の研究, 18(6), 17-26.
- 日本地理学会, 1995: 日本地理学会投稿規定, 執筆要領, 編集手続きおよび内規, 日本地理学会会員名簿(平成7年7月1日現在), 131-138.
- 嶋田 純, 川村隆一, 谷口真人, 辻村真貴, 1992: ヒートプローブ式土壌水分計による圃場内土壌水分変化の観測, 筑波大学水理実験センター報告, (16), 45-53.
- 「天気」編集委員会, 1997: 「天気」投稿および内容案内, 天気, 44, 79-81.
- Turabian, K. L., 1996: A Manual for Writers of Term Papers, Thesis, and Dissertations (6th ed.), The University of Chicago Press, 143-144.
- 日本科学技術情報センター, 1992: SIST ハンドブック 科学技術情報流通技術基準1992年版, 日本科学技術情報センター, 114, 251, 412.